

「〇〇方言らしい」という意識とその形成過程について

—北海道方言を例に—

工藤 詩織(北海道大学大学院生)

1. はじめに

方言意識に関する研究は、大規模な全国調査を行った佐藤・米田(1999)や、特定地域を対象にネイティブがノンネイティブに与える影響を考察した上野(2004)など、幅広く存在する。そういった研究の中では、「方言らしさ」や「地域らしさ」といった表現が垣間見られるが、こういった「らしさ」というものが具体的にどのようなものなのかは、管見のところ詳しく論じられていない。そこで本発表では「方言らしさ」という意識を対象に、その形成要因や過程、形成される対象を調査・考察する。

今回の調査対象は北海道方言である。上記の様な意識研究のうち、北海道方言を扱ったものは全国調査が多い。さらに北海道は「共通語中心社会」(佐藤・米田, 1999)であることから、その方言意識の特徴は他地域との比較の中では表れない部分が多い。そこで本発表では北海道方言を単独で扱うことで、その方言意識の特徴を絶対的に、かつより詳細に抽出することを目指す。

2. 調査手順

調査は、北海道方言のネイティブ・ノンネイティブ両方に対して行った。調査ではまず、北海道を中心とした日本各地の方言や標準語形を含む語彙・文法的要素(以下まとめて「表現」と呼ぶ)のリストから、「北海道方言らしい」と感じるものを選択してもらった。次に「北海道方言らしさ」の形成要因として発表者が予測した因子について、協力者に個別インタビューを行った。以下で、上記それぞれの手順を詳述する。

表現のリストには井上(1981)、見野(2005; 2009a; 2009b; 2018a; 2018b)、都竹(1981)、西田(1981)、渡辺(1955)の掲載項目を全て用いた。ただし項目数が膨大になるため、予備調査を行ってあらかじめ数を削減している。予備調査ではネイティブ・ノンネイティブの協力者計 57 名に、左記文献の全項目中から「北海道方言らしい」と感じる項目を選択してもらった。それぞれの協力者数は均等になるよう配慮したが、有効回答数はネイティブ 33、ノンネイティブ 23 の計 46 となった。以上の結果をもとに、選択率が 3 割未満のものと 7 割より多いものを削除し、残された項目を本調査用リストとして用いた。ここでの集計・削除処理はネイティブとノンネイティブ別々に行っているため、残された項目も両者で異なっている。残された項目の数はネイティブ 65、ノンネイティブ 40 となった。

本調査は、20 代(若年層)・40 代(中年層)・60~70 代(高年層)のネイティブ・ノンネイティブそれぞれ 1 名ずつ、計 6 名を対象に行った。なお、予備調査と本調査の協力者はすべて異なっており、いずれも性別は女性である。また、既述の通り本調査では、発表者が予測した形成要因を扱った。その要因とは、当該表現を周りで聞きした頻度(①)・当該表現の使用頻度(②)・当該表現が北海道特有のものであるという認識(③/特有性)・北海道方言へのイメージと当該表現へのイメージとの関連性(④/方言イメージ)・北海道という地域へのイメージと当該表現へのイメージとの共通性(⑤/地域イメージ)である。以上に加え、当該表現が標準語形ではないという認識(⑥/限定性)と、インフォーマントの身近にいる北海道方言話者について(⑦)も補足的に調べている。したがって、本調査で扱った因子は計 7 つである。

本調査ではまず、本調査用リストから「北海道方言らしい」と感じる項目を選択してもらった。なおここでの選択理由を、後述するインタビューにて尋ねている。つづいて、同リスト中の項目について①・②の頻度を 4 件法で自己評定してもらった。続く③~⑦はインタビューにて尋ねており、③・④はそれぞれ同リスト中の項目に対し「北海道以外で使っていないもの」「標準語にもあるもの」の有無をそれぞれ尋ねたものである。⑤・

⑥は自由回答を求め、⑤をインタビューの最初、⑥を最後に尋ねた。これはこの二つの質問が近似しており、一方の回答が他方に影響を与えうると考えたためである。以上の手順に従って調査を行った。次章にて、調査結果とその分析・考察を論じる。

3. 結果と考察

3.1 北海道方言らしい表現は「なげる」「ざんぎ」等

ここでは「北海道方言らしい」との評価傾向が特に強い項目として、予備調査での選択率が7割を超えた項目を示す(図1)。太字はノンネイティブでも同様に7割を超えた項目であり、「北海道方言らしさ」がより強固に意識されている項目だといえる。

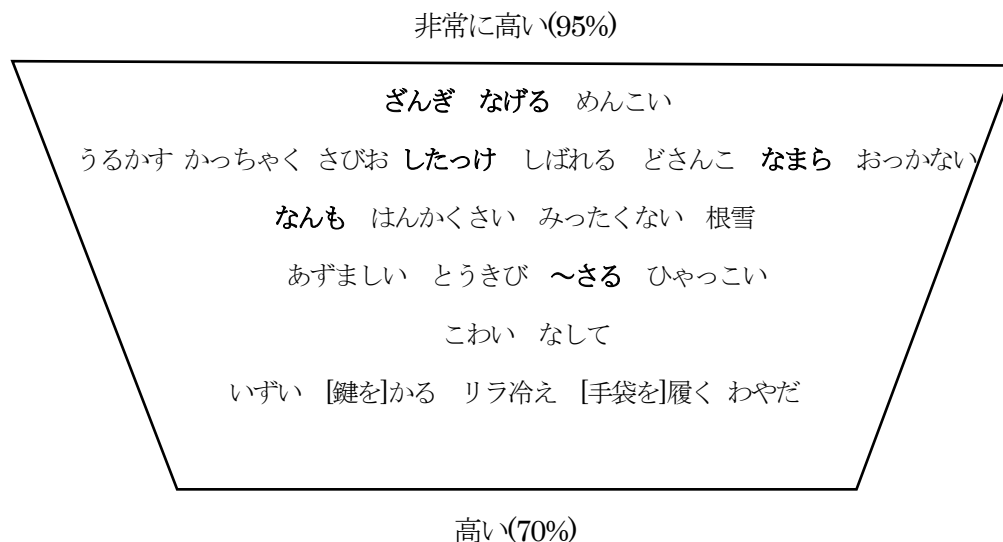


図1: 「北海道方言らしい」との評価傾向が特に強い項目

では、上記の項目選択にはどのような要因が隠れているのであろうか。紙幅の都合を鑑み、次節以降ではE(ノンネイティブ・中年層)、F(ノンネイティブ・高年層)、A(ネイティブ・若年層)の3名の協力者に焦点を当てながらこの問題を考察してゆく。

3.2 自分が使うようになった北海道方言は「北海道らしくない」

協力者Eは、言語形成期を京都府で過ごした中年層のノンネイティブである。「北海道方言らしい」表現の選択には、「雪国のイメージ」という地域イメージに加え、限定性・特有性が影響していた。ただし、いずれも主要因ではあるものの、これだけではEの選択を説明しきれなかった。ここで、Eが述べた選択理由「何回か聞いたことがあると思ったもの」に注目してみる。これはつまり、「見聞きした頻度」との関連を表している。ただし既述の通り、限定性と特有性が一定程度要因になっているため、仮に「見聞きした頻度」が高くても、Eの地元でも使われる表現やE自身が移住後に使うようになった北海道方言は選択されまい。また「雪国のイメージ」という地域イメージも影響していることから、このイメージに当てはまる項目はE自身が見聞きした頻度に関わらず選択されうる。こういった交絡の有無を調べるため、「雪国のイメージがある」「地元でも使う」「(北海道の言葉だと思うが)自分も使う」とされた項目を抜き出し、それぞれ単独で除外した上で見聞きする頻度との相関係数を求めた。また上記3要因を複数組み合わせで除外し、その場合についても求めた。それぞれの結果は表1のとおりである。各数値の上に記されているすべての因子が、その分析で除外したものである。

表 1: 見聞きした頻度と「北海道方言らしさ」との相関における交絡因子の有無

除外 した 因子	雪国のイメージがある				雪国イメージ
			自分も使う ¹		
			地元でも使う ¹		
相関 係数	.202 ³	.212 ³	.572 ²	.374 ³	.459 ²

表をみると、「自分でも使う」の影響が比較的弱いものの、どの因子もおおむね等しく相関係数に影響している。すなわち見聞きした頻度に関わらず、「雪国のイメージがある」項目は選択され、「自分も使う」「地元でも使う」項目は選択されない傾向があると分かる。表 1 の通り、3 つの因子をすべて除外した相関係数は、 $r=.572(p<.01)$ であった。限定性・特有性・地域イメージにくわえ「(北海道方言でありかつ)E 自身が使用しないこと」「E の地元で使われないこと」がおおむね等しく要因となり、それに次ぐ要因として見聞きした頻度が挙げられると分かる。

以上の要因のうち特に興味深いのは、「E 自身が使用しないこと」であろう。というのも、E 自身が移住後使うようになった北海道方言は、見聞きする頻度や限定性があったとしても、一切選択されていないのである。その具体例は「お晩です/でした」と「なして」であり、いずれも限定性を持つ物として挙げられた。また見聞きする頻度も 4 段階中 3 と高い。それにもかかわらず、この両者は選択されていない。このことから、自身が北海道方言を使うようになってもおおむね自身の発話とネイティブの発話は別物だと認識されている E の様子が見ええる。そのため、見聞きする頻度も高くかつ限定性をも持つ(と認識された)表現であっても、「自分が使う」ものはそれだけで「北海道方言らしい」とは感じられなくなるのである。

3.3 「北海道でしか使わない」から「北海道方言らしい」

協力者 F は、言語形成期を新潟県で過ごした高年層のノンネイティブである。「北海道方言らしい」という評価形成の要因は、完全に特有性で占められていた。これは特有性を尋ねた際の「選択したものの全部」という回答や、選択理由の「北海道に来て初めて知ったもの」という発言から示される。F には北海道以外の移住経験がないことから、「北海道に来て初めて知ったもの」=「北海道でしか使われないもの」=「北海道方言らしいもの」という認識が形成されていると分かる。インタビューでは、選択しなかった表現についてその根拠を教えてくださいましたが、それはすべて「北海道にいる今も見聞きしないもの」「地元でも使うもの」「山形の方でも使っていたと思うもの」のいずれかであった。なお、限定性を持たない、つまり標準語形であると判断された表現は全て「地元でも使うから」という根拠であった。F は限定性の認識に誤りが多く、この点も踏まえると、F は自身が用いる方言量を過小評価しているといえよう。しかし F の言語形成地を考慮すれば、これは自然なことだと考えられる。F の言語形成地である新潟県の方言は、北海道方言との語彙・語法的共通性が最も高い(金田一・市河, 1955; 佐藤, 1976; 柴田, 1996)ためである。とはいっても、「地元でも使うもの」が全て限定性を持たないと判断されたわけではなく、自分の発話を通じなかった経験などから限定性を認識しているものもあるようだ。ただ高年層という年代に比してその経験が少ないのは、上記のような理由があるだろう。

以上の傾向は、特有性の影響が大きい点で E と非常に類似している。

3.4 「イメージ希薄方言」の「イメージ」は誰が作ったものか

最後に、ネイティブの協力者を 1 名取り上げる。ここでは、ノンネイティブと共通する特徴は省略し、ネイティブ特有の傾向に注目してゆきたい。ネイティブはノンネイティブに比べ、見聞きする頻度と使用頻度が要因に大きく関わっていた。これは協力者が述べた選択理由や、使用頻度・見聞きした頻度と項目選択との相関性からも言える。しかし若年層の A だけは例外的である。選択理由は「いかにも北海道弁というイメージの物」であり、「自分が使う/聞く項目でも、北海道以外での使用有無が分からないものは選ばなかった」との発言も聞かれた。経験基盤的なイメージではなく、プロトタイプ的なイメージが根拠となっている。しかしそれにもかかわらず、使用頻度・見聞きした頻度と項目選択との相関性は、A も他のネイティブと同程度に高いのである。

¹ それぞれ単独の除外では有意な相関がみられなかった。

² $p<.01$

³ $p<.05$

これはどういうことか。他のネイティブにおいては、使用経験・見聞きした経験の多さが「北海道方言らしい」という評価に繋がったと考えて矛盾ない、しかしAの場合はその逆を考えるべきだろう。つまり、世間一般的な「いかにも北海道弁」というイメージがAに受容され、それがA自身の言語使用にまで影響を与えた、ということである。

ここで、上野(2004)の論を紹介したい。上野氏は、高知県方言を例に、「イメージ濃厚方言」(友定, 1999)における方言イメージの形成・伝播傾向を論じている。それによれば、「イメージ濃厚方言」においてはネイティブの抱く方言イメージがノンネイティブに無批判に受容され、当該方言における諸現象の理由付けに使われることが多い。すなわち、方言イメージの伝達経路は「ネイティブ→ノンネイティブ」の順である。なお、この「イメージ濃厚(希薄)方言」(同)とは、ネイティブがもつイメージの濃厚/希薄さを意味する。一方、本節でみられたAの方言イメージ受容は「ノンネイティブ→ネイティブ」という順序に見える。この現象は上野氏の議論とは対照的であり、また北海道方言が「イメージ希薄方言」(同)に含まれる点も対をなしている。「イメージ希薄方言」における方言イメージ伝達経路は、「イメージ濃厚方言」におけるその逆をゆくのだろうか。

北海道方言は、そのネイティブにはさほど特定のイメージをもたれていない。しかし同時に、北海道という地域がもつ特色は、貴重な観光資源として、また物語作品の格好の舞台としていたる場面で利用されている。そのような他地域との差別化やキャラクター付けとして地域の特色をアピールする時、方言は第一の表現手段として盛んに用いられる。そのようなメディア・観光行政による利用を通し、北海道方言へのイメージは人為的に植えつけられてきたことがいえよう。ネイティブもまた、そのような物語作品に触れ、あるいはそれらの影響を受けたノンネイティブと関わる中で、人為的なイメージを受け取ってきたといえる。こう考えると、北海道方言における方言イメージ伝達のプロセスは、「イメージ濃厚方言」におけるその逆進形とは言い難い。より正確には、後者がネイティブ→ノンネイティブと前後関係を成すのに対し、前者は人為的なイメージ付けがネイティブ・ノンネイティブへと、同時に伝わったものと理解すべきだろう。

「イメージ希薄方言」はほかに、仙台方言や千葉方言などが上げられているが、それらでも同様の現象が起きているのだろうか。これは今後の課題としたい。

参考文献

- 井上史雄(1981). 北海道内の方言差 五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集 北海道のことば(北海道方言研究会叢書第3巻) 北海道方言研究会 pp. 72-83.
- 見野久幸・菅泰雄(2005). 北海道方言は今 形容詞語彙四〇語の意味・用法と分布・動態
- 見野久幸(編)(2009a). グラフで見る高校生と北海道方言: 北海道方言の地理的分布と勢力の現況 科学研究費基盤研究 研究成果報告書
- 見野久幸(2009b). 北海道方言の地理的分布と動態: 日常生活語としての方言の使用現況の諸相
- 見野久幸(2018a). 北海道方言の地理的・势力的分布と動態(1) 調査データグラフ集 語彙編
- 見野久幸(2018b). 北海道方言の地理的・势力的分布と動態(1) 調査データグラフ集 語法編
- 金田一春彦・市河三喜(編)(1955). 世界言語概説(下) 研究社
- 西田直敏(1981). 方言の共通語化の一面 五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集 北海道のことば(北海道方言研究会叢書第3巻) 北海道方言研究会 pp. 23-28.
- 佐藤亮一(1976). 北海道方言の地理的背景—「日本言語地図」第4集について— 佐藤喜代治教授退官記念国語学論集刊行会(編) 佐藤喜代治教授退官記念国語学論集 桜楓社 pp. 583-601.
- 佐藤和之・米田正人(編著)(1999). どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ 大修館書店
- 柴田武(1996). 北海道方言と新潟県方言 新潟県方言と山形県方言 言語学林, 1995-1996, 825-831.
- 田中ゆかり(2011). 方言コスプレの時代—ニセ関西弁から龍馬語まで— 岩波書店
- 友定賢治(1999). 「つくられた」方言イメージと共通語イメージ 佐藤和之・米田正人(編著) どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ 大修館書店 pp. 98-100.
- 都竹通年雄(1981). 私が観察した北海道方言 五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集 北海道のことば(北海道方言研究会叢書第3巻) 北海道方言研究会 pp. 108-122.
- 上野智子(2004). 方言イメージの危うさ—高知県方言「ハシ」と「バッサリ」の間— 高知大国文, 35, 1-15.
- 渡辺茂(1955). 北海道方言集 楡書房